

Interview #208

元気SoCal人

●Ainoco Craftsman/Founder

日本の伝統芸能を世界に繋ぐ ainoco style Custom Bachi

Greg Matsuura

カラフルなオーダーメイド津軽三味線撥(バチ)の考案者であり、尺八、太鼓奏者でもあるGreg 松浦氏のご紹介です。

米国・アナハイム生まれ。手芸が好きな母親と、器用で何でもやる父親を見て育ったOC育ちの日系三世のGregさんは、自然と自分の手で何かを創る事や工夫する事を覚え、手を使っての作業に楽しみを感じるようになりました。

高校卒業の頃、ちょうど友人の父親が自動車修理工場のヘルパーを探していたので、興味を感じて手伝い始めました。その後、ビジネスを引き継ぎ、経営者/オートメカニックとして40年間忙しくお店を切り盛りしていましたが、現職である撥(バチ)職人としての時間をもっとりたいという思いが募り、2019年の6月でお店をクローズして本格的に撥作りに取り組み始めました。長い事懇意にくださったお客様をおいて店を閉めるのは大きな決断でしたが、皆様に暖かく応援いただいて、新しい人生の一步を踏み出すことが出来ました。

三味線を弾くようになったきっかけは、三味線と一緒に民謡を演奏できる尺八奏者を探していると、佐々木会からお声をかけいただいたのがきっかけです。当時三味線に関する知識は皆無でしたが、三味線という楽器と佐々木師匠のお人柄に惹かれて自分も弾けるようになりたいと思いました。

尺八は、OCBC(Orange County Buddhist Church)で太鼓をやっていた時、シニアメンバー数名からなる小さな尺八グループがあったので、伯父から譲り受けた尺八を演奏できるようになりたいと思い、グループが解散するまでの約10年間一緒に過ごさせていただきました。毎週の尺八クラスは、演奏はもちろんですが、人生経験豊富なメンバーの皆さんから、いろいろなお話を聞かせていただけるという、ティーン自分にとってとても楽しく有意義な時間でした。本当にたくさんの貴重な学びをいただいたと感謝しています。

撥を作るようになったきっかけは、佐々木会に入門後「子供の手にも合うよう、小さな撥が作れないか？」という佐々木師匠の依頼で、既成のプラスチック製の撥を削って小さくしたのが始まりでした。伝統的な撥は象牙やべっ甲を使用していますが、ワシントン条約で輸入禁止アイテムなのでアメリカでは手に入りません。お稽古を始めた時には市場にあるバチを使っていたのですが、重さや長さ硬さ(しなり具合)など自分にとっては使いにくかったので、自分の手に合う様に加工して使いはじめました。

佐々木師匠を始めとして日本のプロのミュージシャンの方々のご意見やアドバイスを元に、試行錯誤しながら何百本もの撥を作っているうちに、重さは勿論、ほんの0.1mmでもサイズが違えば弾くときの体感が違い、撥先のしなり具合や薄さも音に大きく影響することに気づきました。駒と糸、演奏者の力具合のバランスも重要なポイントです。色々な要因が関連して織りなす音の世界は非常に繊細ですし、人それぞれの好みや楽曲にも寄るので、一概にこれと決められるものでもないと感じました。波動のサイエンスに魅了された今は、より幅広くリクエストにお答えできるよう、日々精進しています。

現在手掛けているのは、アクリルを使ったカラフルなカスタム撥という全く新しいスタイルですが、伝統文化に挑戦するというよりも、日本の伝統文化を海外に繋げる架け橋でありたいと願っています。「あいのこ」と言う言葉は、日本では差別用語とされて使われなくなっているそうですが、日系三世という、日本人ではなくアメリカ人とも少し違うという自分のアイデンティティを表現するのに「ainoco」がしっくりくると感じます。アメリカで生まれ育ち、発想は英語だけれど、日本の伝統文化に魅力を感じる日本人の心を持つ「ainoco」が、双方の良いところを取り入れて繋ぐ「愛の子」でありたいとの願いを込めています。自分の演奏スタイルに合わせて自由に色や重さ、しなりを選んで作るお一人お一人の為のユニークなカスタム撥が「ainoco」の特徴です。

私は日本の伝統芸能、伝統文化が大好きです。本当に素晴らしいと思います。時々「伝統に革命を起こしていますね」と言われることがありますが、私自身としてはチャレンジするとか変化を起こそうとか、伝統的な素材と競合するつもりはなく、日本の素晴らしい伝統芸能を次世代に繋ぎ、もっと世界中の人に知ってもらいたいという気持ちでいっぱいです。

伝統的な三味線素材は、ほぼ絶滅危惧で、リソースが限られています。伝統をそのまま変えずに守りたいという気持ちと、このままでは消えてしまうという危機感のジレンマを皆さんが感じていらっしゃるのもよく理解していますし、もちろん私自身もそうです。出来るだけ伝統的な音の素晴らしさを残しながら、敷居の高い伝統芸能をもっと気軽に楽しんでもらえることが出来れば嬉しく思います。

「ainoco」のアクリル撥と駒は、表現が豊かで音のフレキシビリティが多角的なので、他の楽器と合わせたり、西洋音楽との相性も良いと自負しています。レコーディングやマイクを通した音のバランス調整がしやすく、見た目もカラフルなので、色々なジャンルで活躍する世界中のアーティストの方々に喜んで使っていただいています。

Q: Gregさんにとって、三味線の魅力は何でしょうか。

三弦という別名のある三味線は糸は3本のみで、ギターのようなフレットが無いので自分の感覚を駆使して演奏する楽器です。シンプルな作りでありながら音の幅が広く、繊細で色々な表現ができるところに魅力を感じます。

Q: カラーの琴爪も作っていただけますか？

琴の爪を綺麗なアクリルカラーで創るのも楽しいプロジェクトの一つです。演奏する方も観客の方も、明るく楽しく気持ちのよい空間になると喜んでいただいています。私は使っていただく方のことを考えながら撥や駒を作る時間を本当に楽しんでいますが、同時に何か新しいものを創り出すとか修理すること、そして活用方法のアイデア探し古いものに新しい命を吹き込むといった、スペシャルリクエストのチャレンジも楽しんでいます。

先日は日本のプロの三味線奏者の方から、130年ものの煤竹(古民家の天井から取れる、囲炉裏の煙で燻された竹)を使った駒を作って欲しいと頼まれて制作しました。日本では手作りをする職人さんがリタイアされてしまい、加工先が無くなってお困りだったそうで、とても喜んでいただきました。

Q: 伝統楽器用具の製作者からの次世代へのアドバイスをお願いいたします。

自信を持つ、自分自身を信じるというのが一番難しいと思います。私自身がそうでしたから。でもこれを現実化するにはどうしたら良いか？ もっと良い方法はないか？ このアイデアで何が出来る？ と、自分で『考える』事が大切だと思います。そして自分の夢をサポートしてくれる人を探すのを恐れずに進むこと。私は一緒に楽しみながら創りあげてくださる皆様、「ainoco」アイデアをサポートしてくれる方々に恵まれている事に心より感謝しています。ビギナーからプロフェッショナルまで、多岐にわたる世界中の「ainoco」サポーターの方々に、ここで改めてお礼を申し上げます。

(Interview: Toshiko Okawa 大川敏子)



Greg 松浦
Ainoco Craftsman/Founder

1961年生まれ。第二次世界対戦時に日系人収容所での生活を経験した両親から、今あるものを工夫して必要なもの、ユニークなものを創り出すという自由な発想力を学ぶ。

1979年にはワインの樽を使った初のアメリカンスタイルの太鼓を制作。尺八、篠笛、津軽三味線奏者。現職は手作り「ainoco」三味線撥と駒の職人。

連絡先: www.ainoco.com
www.instagram.com/ai_no_co/
ainocoinfo@gmail.com



浅草追分 高森彩花さん(二代目佐々木光儀)と川嶋志乃舞さん



ainoco style Custom Bachi



川嶋志乃舞(CHILI GIRL)さん